

# 対馬文化財通信

第3号



対馬市文化財保護審議会

表紙写真

芦見遺跡(上対馬町)の発掘調査風景

2010年2月25日撮影

# 対馬文化財通信

第3号

対馬市文化財保護審議会

## 目 次

一巻頭言一

□ 森の再生とツシマヤマネコ ..... 1

□ 島の猛禽たち ..... 2

□ 朝鮮通信使の光と陰

第十一次・明和元年の朝鮮通信使 ..... 3

□ 日々是、歴史体感なり ..... 4

□ 赤米伝承 ..... 5

□ 文化財課だより ..... 6

## 一卷頭言

### 森の再生とツシマヤマネコ

この一月二十三日(土)、対馬市交流センターで開かれたシンポジウム「対馬から林業再生を考える」(対馬森林組合主催、日本に健全な森をつくり直す委員会共催)を聞きました。シンポジウムにさきだち、C.W.ニコル(京都大学教授による基調講演につづき、竹内典之同大名誉教授、梶山恵司内閣審議官、岡橋清元清光林業(奈良吉野林業の山持ち)第十七代当主、小池一三町の工務店ネット代表など四氏による連続講演がありました。

\*  
さほど広くない山ながら、祖父の時代から父や兄たちが実生から育てて山に植え、やつと登れるほどに育った幼木の杉や檜に登つて枝をうち、また間伐をくり返し手塩にかけて育てている姿を見てきた小生は常々、多くが植えた時のままで、全身枯れ枝をまとい、間伐もほとんど行なわれていないため、昼なお真つ暗で下木も育たない対馬の密集植林を見るたびに心が痛む思いでした。

「日本に健全な森をつくり直す委員会」(委員長=養老孟司東大名誉教授)は、前記竹内典之先生提唱になる「森里海(もりさとうみ)連環学」の理念をふまえ二〇〇八年に発足、「二十一世紀を森林の時代にしていく」ための世論形成を目的に始めた委員会だそうです。

連續講演を聞いて、間伐で森に光を通すことが、いい木が育つ前提であるばかりなく森の再生、つまり下木や下草が生え、ネズミや昆虫が育ち小鳥が飛び交う自然林に近い環境にもなるということを改めて教えられました。この日話題にはなりませんでしたが、森が豊かになれば、それはそのままヤマネコの生息環境の改善にもつながるはずです。それを考えた人がいたかどうか:

さて、翌二十四日(日)、同じく交流センターで開かれた「ツシマヤマネコ保護増殖事業実施方針(案)」の説明会は、前日の上記「林業再生を考える連続講演とシンポジウム」とは対照的でした。「林業再生」の方ですが、会場の二階イベントホールは聴衆であふれ、三階にもかなりの人がはいつていました(主催者によれば聴衆はおよそ九百人、半数近くは女性かと思われましたが)。

一方「ツシマヤマネコ」の方は、三階の大会議室で行なされました。出席者はわずかに三十~四十人ではなかつたかと思います。また、林業再生の方は連続講演とシンポジウムで四時間、ヤマネコの方は前半がいざれも日本では絶滅種で中国からもらい受けたつがいから増殖に成功した佐渡のトキと兵庫県豊岡市のコウノトリの映像紹介、後半が本論の「ツシマヤマネコ保護増殖」の説明会でそれぞれ一時間、計二時間の報告、説明会でした。

\*  
「保護増殖事業実施方針(案)」(本編)は、わずかに四ページの小冊子ながら、ツシマヤマネコの現状と保護の必要性を説いたあと、増殖事業の目標、基本方針、保護対策の方向まで、分かりやすく簡潔に提示した労作で、ツシマヤマネコにかける環境省の並々ならぬ意気込みと情熱が秘められています。とくにその保護増殖事業の目標は、(1)当面の目標、(2)中期目標、(3)長期目標、(4)最終目標の四段階に分けて具体的に設定しています。

まずは当面の目標達成のために全力をあげていただきたいのですが、本事業はひとり保護センターに任せることではなく全島民あげてこの実現のために努力しなければこの大事業は成就是難しいと思いました。(小松勝助)

## 島の猛禽たち

ハチクマという鷹をご存知でしょうか。トビぐらいの大きさで名前の通りスズメバチなどハチの幼虫が好物の猛禽としてよく知られています。日本では森の深い長野県信州あたりで繁殖しています。そのハチクマが春の渡りの五月の上旬から中旬にかけて内山岬上空を毎年数百に達する群れで南下しています。

同じ頃、島内の田んぼ周りの林縁ではアカハラダカが羽を休めています。アカハラダカはハチクマとは反対方向の朝鮮半島方面に渡っていますが、ハチクマほど大きな群は見かけません。ところが、秋の渡りの始まる九月には、そのアカハラダカが十万を超える大きな群で内山岬上空を南に渡っています。

ピークの中旬の頃は一日で数万の群を観察することも稀ではありません。岬の観察展望台に

立つと北の舞石壇から南の萱場山まで、まるで川が流れるようになります。春に同じ岬上空を南下していたハチクマは、秋には北上していきます。もつとも春とは違つてその数は九月を通してようやく二桁に達するぐらいです。

このことから、アカハラダカの場合、秋は対馬を通過して東南アジア方面に渡るのがメインのコースなのに對し、春は中国大陆沿いに北上するのがメインで、その内の少数が東シナ海を東進して対馬を経由しているに過ぎないと考えられます。その反対にハチクマの場合は、春にかなりな群が対馬を経由して中部地方の繁殖地に入りますが、秋には大半が五島の大瀬崎から東シナ海を横切って中国大陸経由で越冬地の東南アジアに達するコースをとるようです。この

うに延々と続くアカハラダカの群れを一望できます。その様子はまさに壯觀の一言です。一方、春に同じ岬上空を南下していたハチクマは、秋には北上していきます。もつとも春とは違つてその数は九月を通してようやく二桁に達するぐらいです。

このことから、アカハラダカの場合、秋は対馬を通過して東南アジア方面に渡るのがメインのコースなのに對し、春は中国大陆沿いに北上するのがメインで、その内の少数が東シナ海を東進して対馬を経由しているに過ぎないと考えられます。その反対にハチクマの場合は、春にかなりな群が対馬を経由して中部地方の繁殖地に入りますが、秋には大半が五島の大瀬崎から東シナ海を横切って中国大陸経由で越冬地の東南アジアに達するコースをとるようです。この

ほか、四月の中旬頃から内院や浅藻の周辺で羽を休めているのが観察されるサシバも、このころ対馬を経由して西日本各地に渡っています。しかしこのサシバも秋にはほとんど観察されません。このように対馬を通過するタカの渡りは種類によって、また季節によってメインのコースが異なることが判ります。

ところで島内で見られるワシタカ類はこれだけに留まりません。アカハラダカの季節の九月には少数ですが、チゴハヤブサやオオタカなどが渡っているのも観察されます。

さらに十月になると、対馬ではスズメダカとも呼ばれるハイタカやチヨウゲンボウ、少し遅れて十一月ごろにはノスリがそれぞれ冬鳥として入ってきて、島内各地で観察されるようになります。また、ツミもこのころ対馬に入るようですが数はとても少ないようです。そして十二月になるとよいよオオワシや

オジロワシといった大型の猛禽がやってきます。

その他、春と秋の渡りの時期には、ハイイロチュウヒやアカアシチョウウヘンボウあるいはマグラチュウヒ等といつた希少種のタカ類も毎年のように見るこ

とができます。

一方、留鳥として、周年島内に居ついている猛禽には、対馬でビシャとも呼ばれるミサゴがいます。それにハヤブサも少数ながら島内で繁殖しています。

対州名物のトビも実はワシタカの仲間です。

このようにみてくると、対馬はまた猛禽の島であるともいえます。そして多くの猛禽たちにとって対馬が渡りの重要な中継地になつていることがわかります。それにしても食物連鎖の頂点に立つこれらの猛禽が数多く見られるということは対馬の自然がまだまだ豊かであるという証明なのかもしれません。

# 朝鮮通信使の光と陰

## 第十一回・明和元年の朝鮮通信使

はじめに 慶長十二（一六〇七）年三月三日（新暦三月三十日）、正使呂祐吉以下四六七名の朝鮮使節一行が、対馬府中に到着しました。近世江戸時代を通じて、これが最初の朝鮮通信使です。

江戸時代に唯一存在した国家外交の象徴として、朝鮮通信使来日の意義は高く評価されています。十二回の来日の善隣外交のステージでは、異質の芸術、学問、技能等の授受という光の部分もありましたが、文化摩擦による陰の部分もありました。

**崔天宗殺害事件** 明和元（一七六四年、第十代將軍徳川家治の襲職を祝賀する、第十一次の通信使が来日したときのことです。

江戸城での公式行事を終えた一行は、四月五日大坂西本願寺津村別院の宿舎に到着しました。

その二日後、事件が起きまし

た。通信使の中官崔天宗が、七日の未明、咽喉から夥しい流血をして絶命したのです。現場に「魚水」銘の槍の穂先が残されていましたから、犯人は対馬藩のお雇い通詞鈴木伝蔵ということが発覚しました。事の発端は、日本人の加子と通信使の下官が、長浜町の荷揚げ場で始めた、手鏡の紛失を巡る言い争いに端を発し、崔天宗と鈴木伝蔵が口論になつたことです。

このとき崔天宗は皆の前で、持つていた杖で伝蔵を、散々打擲したというのです。多くの人前で恥をかかされ、名譽を傷つけられた伝蔵は、その七日未明に崔天宗を殺害して、逃走したのです。逃走した伝蔵は、結局四月十八日、有馬に向かう途中捕縛され、五月二日通信使一行立会いの下、月正嶋（大坂）で処刑されました。

この事件に対する対馬藩の理

念は次の通りでした。「宗家文庫史料」に、「鈴木伝蔵、崔天宗と口論の上打擲に逢い候、虚実の一事やと存じ候、其の訳は聘使は修交の大使に候えば、彼の国の法令制度嚴重にこれ無く候て叶わず候處、従員の内日本人を打擲され候法外より刃殺の変と相成り候故、第一崔天宗国禁を犯し候罪人にて候事：朝鮮國にては人を打擲せしめ候事を尋常と心得、又打擲に逢い候者さて恥辱とも為さず：日本の風習、踏み、蹴り或いは睡仕掛け、或いは打擲等の恥辱に逢い候時は決して容赦致さず事に候訳は、信使前渡海訳官へ相違し候、節目に講定せしめ三使にも存じては、第一回の通信使の使行録「海槎録」の書き起こし、慶長十二年正月十二日の記事に、「対馬島がたとえ和解することに、對馬島がたとえ和解するとの要請はしてきて、實にこれはわが国が恥とするところであります。今、貴国が古きを改めて新しく慰簡を先に寄こし、すなわち先代の非を改めたい」と見えます。朝鮮が家康に対しても要求した「先為國書」に対して、対馬藩による「偽造國書」を受けた文であることはいうまでもありません。

崔天宗殺害事件は、日朝の不幸な文化摩擦でした。

孝行芋朝鮮へ渡る この明和の通信使のとき、現在も韓国で親しまれている貴重な食文化であるさつま芋が、対馬から朝鮮に

送られました、このときの使行録「東槎録」に佐須奈でこのさつま芋を手に入れて、釜山に送つたきさつが述べられています。その形状、風味、高い有用性や栽培法、保存法を述べ、「どうしてわが百姓に大きな助けでないことがあらうか」とも述べています。

# 日々是、歴史体感なり

厳原町を中心に観光客の歴史案内をさせてもらうことがたびたびあります。ある観光客の方が、「対馬に来ると日本の歴史がわかるようですね」と話されましたが、まさに対馬は日本の古代から近代までが見事に濃縮された歴史の宝庫ではないかといふことが、歴史をかじつただけの私も案内を通して体感できるような気がしております。

対馬の歴史文化は、古くから大陸と通交する日本の窓口として、外寇の前線基地（辺要の地）として、あるいは鎌倉時代から明治の初めまで宗氏支配の島として、個有の歴史を育んできた島であります。これらの歴史のひとつひとつに刻まれているであります。島に生きざるを得なかつた人々の、苦しみや喜び、智恵と汗を、決して忘えることのないと思われる歴史の現場か

ら、その時代の声を、ふと感じたが、こういう機会に遭遇する自分自身の日々を、密かな楽しみとして過ごしています。

幸い専門的なものは別として、一般的な歴史書は、身の回りにいくらでも接することができます。学習することも十分に時間はとれる状況にあります。しかしながら私自身は、「現場重視の歴史学習」を心がけています。もちろん著書を開いたり、資料を調べることは重要であり、歴史を学ぶ基本的な姿勢の第一義的なことであることは間違いないと承知しているつもりですが、「読む・調べる」と同様に日々、いやそれ以上に、まず「現場を見る」その上で「読む・調べる」を、繰り返し学ぶ手法を自分なりに組み立てているところであります。

元年（一五九二）、秀吉の文禄慶長の役の際、本土から朝鮮半島に最も近い佐賀県鎮西町に名護屋城を築き、前線の兵站基地として築城されたのが、壱岐の勝本城、そして対馬の清水山城です。この山城でありますが、対馬に初めて来た人に、町から仰ぎ見て説明してみても、この山が、秀吉が天下統一を果たした後、息もつかせぬ性急さで朝鮮・明に侵略するための兵站の城とは、とうてい想像できにくいけれど、天下を揺るがした山城跡と垣を見せてはいますが、それだけ天を仰ぐと、そこには、いかほどの歴史があるのです。

ところがです。ところが、いつたん山城の麓まで行くと、がらつと雰囲気が違ってきます。うつそうとした林の中に、勾配のある坂道がくねりながら続いている。その右側には三の丸から下に向かって堅堀の跡が残っています。また三の丸から見下ろす厳原城下の町は、全体が一望できるとともに、万が一港に緊急の場合があつたとしても、その様子が手に取るように分かるようになっています。

三の丸から二の丸に登る平地には、ところどころ出張りが設けられ、一の丸の頂上に登ると、周囲が一望できるとともに、円形に石垣を巡らせて城郭を築いていることが予想できます。これが秀吉の野望の産物であることを思うとき、対馬藩の苦悩はいかほどであつたのか、想いは往時を駆け巡ります。

このように、読んだり聞いたりしてること、実際見て知ることとに大きな違いがあり、「現場を見る」ことの大切さが、なるほど、とうなずけます。私はこれを「体感」と呼んでいます。歴史を体感することの楽しさ、これを学ぶことは私自身のこれからの課題でもあります。

# 赤米伝承

し、盃を酌み交わし始めました。

主藤さんの話では、四人とも従兄弟だそ

うです。同時に手前の部屋でもテーブルに

二月二十三日（旧暦一月十日）に豆酸の

御馳走が並べられ、私も勧められました。

赤米頭受け神事があるというので、現在一

車で来ていたので飲めないのがとても残念でした。やはり祭りことは飲まなくては。

赤米頭受け神事があるというので、現在一  
人だけになってしまった主藤公敏さんに電話して行事を見せてもらうことにしました。私は旧嚴原町役場時代に広報を担当していました。十五年前に一回だけ取材に行つたことがありました。念のために赤米神事について新聞記事のスクラップを読みました。

「頭受け」とは秋に収穫した赤米の種もみを詰めた神俵を次の当番に引き継ぐこと。年間十回の神事の中で最重要行事。しかし神事に伴う金錢的、肉体的負担が大きいため、神事を受け継ぐ「頭仲間」は年々減少し、二〇〇七年から主藤さん一人となつた。同神事は国選択無形民俗文化財に指定されている。

午後七時頃、主藤さん宅に行くと、「どうぞ中へ」と言われ、神俵の隣の部屋で待つことになりました。十五年前は家の中に入るこさえできなかつたので、「赤米様も優しくなつたんだ」と勝手に解釈しました。しばらくすると神様の部屋に四人の方が着座

・対馬の貴重な財産として、(後世に)残

したい。

・寄付金をいただき本当にありがたい。

この日、私は夜十二時までおりましたが、

皆さん飲んでいい気分になつていて、やはり素面ではきつかったので途中で帰りました。翌日、記者の一人に聞いたたら、五人のうち二人はコタツに寝て、翌日の朝に

赤米の餅を田んぼに埋めて豊作を願う儀式酒を勧めたので、どこまでが取材で、どこまでが世間話なのかよくわからなくなりました。記者の中で二人は毎年欠かさず来ていて、かなり親しくなつているようです。

さて、主藤さんからいろいろな話を伺いましたので、いくつか紹介します。

・(正月十日の)頭受け行事だけマスコミに取り上げられることが多いが、他にも年間十回の行事がある。

・頭仲間が一人になつてしまつて、神事が成り立たないので、どうにかして増やしたい。

・この神事は農業もやらなければならぬが、豆酸で農業をしている若い人はいるから難しい。

・平成十九年から一人になつて金錢的、肉体的につらいが、かつての仲間には見

【参考】  
主藤さんが、「この神様は酒が大好きでのう」というのは本当でした。  
(文化財課 梅野菊次)

一赤米が今でも強く育っているのは、土地その他悪条件に強いからである。粉の生命力が強く、どんな土地にでも適応できるということが生きのびてきた要因であろう

(城田吉六 1987『赤米伝承』董書房)

## 文化財課だより

### ○文化財庭園フォーラム

広く「文化財庭園のもつ価値」について理解を求め、日本の優良な文化財として保存継承することへの気運を高めることを目的とした『文化財庭園フォーラム』の第七回全国大会が開催されます。

対馬藩主宗家墓所本堂裏庭園と旧金石城庭園は、近年その高い文化財的価値に注目が集まつており、今回、所在する厳原町での実施が決定されました。

・期日 十月十五日～十六日

・場所 万松院

・主催 対馬市交流センター

・主催 文化財庭園保存技術者協議会  
対馬市教育委員会

・期日 十一月十二日～十三日

・場所 対馬市交流センター

・主催 対馬市他

### ○第一回古代山城サミット

西暦六六〇年、朝鮮半島では日本の友好国百濟が唐・新羅の連合軍によって滅ぼされました。日本は百濟を救うために大軍を派遣しましたが、西暦六六三年に白村江の戦いで大敗し、日本軍は撤退しました。

以後、唐・新羅の侵攻に備えて国防体制が急がれ、朝廷は大宰府を守るために六六四年に水城を、六六五年に大野城を、六六七年に対馬の金田城を築かせました。

これらの朝鮮式山城を文化遺産として現代に活かし、また歴史的資源として未来につなぐため、「日本最古の山城祭り」と同時に開催されます。

### ○国境フォーラム

日本の「国境」地域に位置する自治体の課題や振興策などを話し合う「国境フォーラム」が対馬市で開催されることになります。

・期日 九月二十四日～二十五日

・場所 大野城市

・主催 対馬市交流センター

・主催 文化財庭園保存技術者協議会  
対馬市教育委員会

○俵家→袖谷家旧蔵「藤家文書」調査  
昨年六月から対馬消防署三階で調査中です。ご覧になりたい方は事前に文化財課に連絡ください。

北海道根室市、東京都小笠原村、沖縄県与那国町の首長が参加し討論会などを行ないます。

## 対馬文化財通信 第3号

発行日 平成22年(2010)3月31日  
編集 対馬市文化財保護審議会  
発行者 対馬市教育委員会文化財課

長崎県対馬市美津島町雞知甲1287番地1  
TEL 0920-54-2341  
FAX 0920-54-4046

印刷 みつしま印刷 TEL 0920-54-4639

